

名付けられたと云う逸話もある。

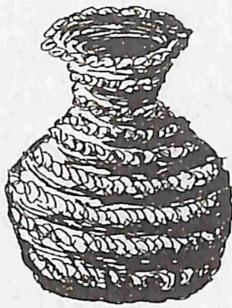
地方史研究家の説に依ると、古くは『加勢』『加瀬』『河瀬』『嘉瀬』と色々な漢字で書かれて、現在の嘉瀬に落着いたとありますが、

漢字の意味から解釈すると

- (一) 加勢とは、すべての万物を助け、勢を増しとあります。
- (二) 加瀬とは 水が浅く 清く激しい流れを大きくするとの意味。
- (三) 河瀬とは 河川の水が浅く、澄んでいて、流水の急な、激しい所の意味。
- (四) 嘉瀬とは、川の水が浅く、青く清く澄み、流れが急で、喜ぶということ。

村(邑)の呼び方は同じであるが、漢字の違いによって、意味が変化するとは、意に解いせない。往時の人々は、浅学で、漢字に疎いので、勝手に漢字を応用したに違いないと愚想するが、往昔時代に邑人が 邑が発展することを願ったに違いない。

嘉瀬の語原に、色々な諸説があるが、嘉瀬と云う土地の名は、私から云わしむれば、嘉瀬光明宗範の『名字』を取って付けた。古い開村の土地の名前であることに確信す、伝々語り伝えられてきた言語を、嘉瀬の語源としたい。



山 中 正 津

記録に現われたのは、正保二年(一六四五年)の津軽知行之帳の田

舎部の新田『嘉清村』として高五五・八一石と記され、寛文四年(一六六四年)の高辻帳に三七七名とあり、貞享四年(一六八七年)の検地帳に『嘉瀬村』と書かれ、田方一四八町九反七畝二二歩、畑方三四町一畝二七歩、田畑屋敷合せて一八二町九反九畝一九歩、村高一二五・二七石、一畝一四歩の蔵屋敷があり、漆木五八木、除地として八幡社地一町一畝四歩、薬師堂地三畝六歩がある。

となっており、さらに『未々田畑可致開発場所』として一八七町九反二歩があった。と書留められてある点からみても、嘉瀬は開発可能なる地域であった事はうなづける。

『嘉瀬』も『嘉勢』も、第一集折込図『加瀬城』に使用されている『加勢』にしても四〇〇年前程度のものであり、それ以前に開けた邑(むら)であるならば、やはりアイヌ語の『丘が広い』という意味の『カセ』が語源としては一番適切であると考える。

現在の『嘉瀬』にしろ嘉清・嘉勢・加勢という文字は、『カセ(広い丘)』の発音を後年文字で記録するところから漢字により当てはめて書いたものであろう。それも無意味な当字ではなく、その時代の人々の切なる希いを込めて、水の清い、勢いよく発展してゆく村の姿を望んだものと思えます。

約三〇年前の津軽知行高之帳に『嘉清村』の名が出る以前に伝承としては、それより七四年前の元龜二年(一五七一年)に嘉瀬八幡宮が再建されたと云われている。

元龜二年と言えば大浦為信が謀反を起して石川城(現弘前市石川)の南部高信を攻め滅した年であり、当地方は、まだ為信の支配下にな

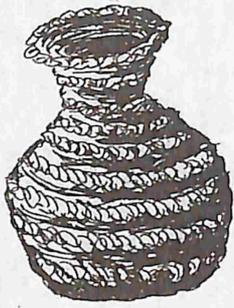
いころに既に神社が建てられていたのである。

当時（鎌倉末期）の建造物としては、土地に密生しており手軽に入
手できるヒバ材が使用されたであろう。元龜のころの八幡宮のあった
場所も現在地ではなく、別な所と思われる。

現在の宮地は、西館跡であり、天正十五年（一五八七年）九月大浦
為信が嘉瀬西館・東館の館守を倒し、翌十六年六月飯詰高樞城の朝日
左衛尉（藤原行安）を滅して津軽を統一し、天正十八年為信は秀吉に
謁して所領安堵、津軽氏を名乗ることになるが、西館跡に八幡宮を再
建させ、宮地として一町一畝四歩の検地帳よりの除地として、人心の
安定を狙ったものではないかと思われる。

このように、元龜二年再建は、十三安東氏の支配下にあったころと
思われるし、ヒバ材の耐用年数からみても三百年以上の年数を保ち
（参考 弘前の長勝寺三門は二六二九年の建立）とすれば、今から八〇〇
年ほど前には村は存在していたと考えても間違いではないだろう。

広い丘陵地帯と、清い水の流れに沿って、人が住み、集落を作り、
狩猟、漁撈生活から農耕文化へと移って行った。「カセ」の語源はア
イヌ話からきたものである。



木村治利

也ろこは、土地利用又は自然地名、個人の占有を表現した占有地名、

歴史地名、そして土地が細分化されると、従来の地名に上下・方位・
大小・新古の分割地名などがある。

とくに山・川・谷・野、原など地形を意味する普通名詞からおこっ
たものが多い。こうした自然地名ともいえるべきものの中に沢、沼、池、
泉、井など水の縁のあるものが多い。これは人が最初水源を求めて居
住を構えたのによるが、日本の稲作が水を必要としたためである。嘉
瀬の地名もこの地形から生れたものと思われる。

嘉瀬村は佐賀県にもある。（現在佐賀市に合併）佐賀平野を貫流し、
有明海に注ぐ嘉瀬川のほとりにある。嘉瀬川は背振山地に源を発し、
全長六一キロメートル）佐賀平野の水利上で最も重要な地位を占め、
灌漑面積一一六六ヘクタールに及んでいる。

我が村とどちらが早く命名されていたかは、さだかでないが環境が
よく似ている感じがする。（当時我が村も岩木川のほとりにあった。

また、嘉瀬という名字もある。従って嘉瀬は「カ」「セ」のアイヌ語がなま
ってカセになったとする説もあるが、なぜ佐賀県に嘉瀬村があり、黒
石地方辺りに嘉瀬という名字があるのか、その関係がわからなくなる。
青森県に浅瀬石・追良瀬・奥入瀬・風合瀬など瀬のつく地名がある
のに、他県にこの地名は見当らない。これらはアイヌ語かも知れない。

安部貞季が、康永二年（一三四三）に作成した地図に中柏木、嘉瀬、
小田川等記載されていた通り、嘉瀬という字が正しいと思う。

今から六百年以上前、雲雀野、駒留、萩元などの田圃は岩木川の水
面下にあった、水は小栗崎、孤崎、観音山の下まで遠浅が続き、人々
は観音山附近に居住していた。

「嘉」はよい、「瀬」は、水の流れというところから、嘉瀬の地

名が生れたのではないだろうか。



原田万治

今の嘉瀬という文字の地名が、康永二年に作成された地図に、始めて出てくるわけだが、その前にも音読みとして、「カ」「カセ」「カヒ」と、いろいろと呼ばれたに相違ないだろうが、いずれにしても、先住民の呼称による指向性の影響が、非常に大きいだろう。

アイヌ語は全く無知で知る由もない私であるが、北海道の地名が五十音の『は行』の発音が多く使われているところを見ると、『カフ』『カヒ』『カセイ』があるいはアイヌ語からきたのかも知れない。

康永二年につくられた地図の一枚を、中里町今泉の青山兼四郎さんが所蔵しておりますが、嘉瀬は、主要な道路筋の村とは違い、おのずと隠れ里としての性格を帯び、人との交流がとどまり、そこには停帯した人間の溜り場の巢で、むしろ隔離里であるときえ伝えられている。

時の権力による政治的な、落人の群れとは違い、主に津軽のなかの悪疫病の患者が、類を呼んで集まり、茸原の中に、掘立小屋を造って生活を営んだのが、嘉瀬の集落のはじまりとも伝え聞くがア。

嘉瀬の語源を、探れば探るほど味わいがでてくることだろう。中世の頃から、社会交流の動きの少ない村とすれば、自然を対称にした名称が、『嘉瀬』となったであろう。



木下清一

『木下清一の家、どこでしよ』と聞かれても、嘉瀬ではピンとこない。『角長の家、どこでしよ』と聞かれると、『〇〇商店の四ツ角の家、ほでしね』と、早座に答えがハネ帰ってくるのが嘉瀬である。嘉瀬は古くから、何んの誰が氏と言っても通じない。屋号の『アダ名』で、それぞれの家が呼ばれてきた。これは地域住民に名字がなかったころからの名残りであろう。

『嘉瀬』という固定した呼び方の語源はと問われても、卵が先かニワトリが先かの例えで、確証は得られないが、斉明四年（西暦六五八年）阿部比羅夫日本海を北上、延暦二十年（西暦八〇一年）坂上田村麻呂蝦夷征討以前にも、嘉瀬地区内に先住民が居住していたことは、土器の出土することに立証できるものの、当ても『カセ』という固定した邑名で呼ばれていたかどうか疑問の残る点だ。

さて、津軽に稲作文化が入り、湿原が開田されて、どこそこの川辺に、どこそこの出崎の、耕作地に近い丘に、或る一族の居住地ができ、開田が広がるにしたがって、分家別家の数も多くなり、集落ができて、一つの邑が構成されると、必然的に他の邑と、交易交流が盛んになると、一つの邑としての個称が必要となってくるところから、それぞれ

例えば 谷の中に位置 〓 谷中

森に囲まれる位置 〓 森内

海で魚がとれる位置 〓 豊海

山の中に位置 〓 山中

神の住む位置 〓 神住

川の端に位置 〓 川端

沼地の端に位置 〓 沼津

柳が三本ある位置 〓 三本柳

という古代の集落の個称は、邑の位置する自然環境によって呼ばれるようになったらうと考えられる。「汝、何処の誰だば」が「嘉瀬八重だ」と個称で応答できるようになったのらう。

また、前九年の役（永承六年、西暦一〇五一年）後三年の役の、源氏が奥州を攻めた時代に下ると、一門の武将ともなると、「奥州有間」の庄、嘉瀬の住人、嘉瀬三郎正敏見参 とか、出身地の名を名字に載せて、名字を嘉瀬とする例もあり……。

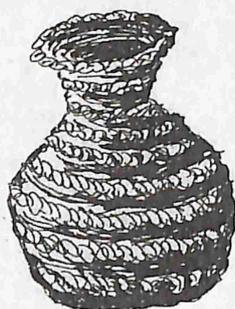
鎌倉幕府が開かれ、津軽にも、鎌倉御家人による地頭衆が統治するに及んで、地頭の名を冠した村名や、豪族にのしあがった治領者の名が村名に、また開村の先駆者名を村名としたことも考えれば、村の成立過程の変遷によって変り、村名の語源は、発生成立する因子によって一様でなかったらう。

津軽に流刑者、移住者、時の権力者が派遣する統治者が他国から流入することが繁くなるにしたがって、津軽も開発が進み、様々な地名ができ、現在津軽の村名や名字を見ると、九州、中国、北陸、越後也て、同一の地名が存在している事実は何を物語っているのか？

津軽は他国民が流入した混血のたまり場の果
藩政も中期に入って、津軽の湿原の開拓も進行して、原野の中に新しい村々が開村され、何々孤立、新地〇〇村が誕生。津軽の石高（生産量）が大巾にアップしてくる。

以上のことから、津軽の各村々が、それぞれの過程の変遷にしたがって成立、村名もそれなりに附された歴史が存在したのであるが、私には「嘉瀬」の村名が、時の地頭、村長、豪族によって名付けられたものでなく、嘉瀬の集落が所在する位置と、その生活環境から、アイヌが付けた名前でもなく、私達の祖先である、東日流 夷人が、自然の恵みに富み、清き水の得られる所に感謝して「カセ」と言い習わし、伝承されてきた名が「嘉瀬」と結論付け、「嘉瀬」は津軽でも古い方の部族であると「誇り」たい。

中世まで文献にも出てこなかった「嘉瀬」の地名ではあるが、消えることなく「語り部」によって伝承されてきたであろう嘉瀬と云う名の「語源」。解名を困難にした原因は、東日流を侵略統一した久慈弥四郎こと大浦為信が、東日流古来から記録されてきたであろう古文書を、焼却し去ったことにも一因している。



地名と氏姓

姓の源流は、古くは地名に起因するものと、高句麗・百濟 新羅・

漢からの渡来した帰化人の姓と、それぞれの職業の、造部・語部・工部・社家から成立してきたと云う。帰化系であれば『泰』『金』『今』の例になる。

丹羽基二著『姓氏の語源』からひろってみると、

○ 『カセ』の語源『セ』は水の浅いところ。『カセ』は水ざわの岸が原意で、狭長地のカセ地（やせ地）の丘に付けられた地名に起因するとされる（山中正津（記）ふるさとを探る記事に掲載の嘉瀬古代の位置を参照してみて下さい）

姓氏の『嘉瀬』は、鹿瀬・賀瀬・賀世 加世の用字にも使われ、地名からきた名称とされ、紀井熊野連合族の一族の裔という。

また、『姓氏の語源』（代表姓氏百）からの姓氏の起因をひろってみると、

○ 『原田の姓氏』原田の姓は地名から起ったもので、特に九州地方は多い姓と云う。九州の大族大蔵姓の後裔で、筑前国御笠郡（筑紫郡）原田村が発祥とされ、また菊地一族の流れをくむ肥後国球磨郡原田村発祥の氏族からも出てきていると云う。

○ 『木村の姓氏』喜村・木邨・木邑・木村に通用し、紀姓の後裔で摂津国都賀郡木村が発祥とされ、類人一族姓に喜務良・城村・基村・季村・岐村・岐邨・帰村・寄村・貴村・鬼村があるという。

なお、統いて『姓氏の語源』（姓氏小辞典）では

○ 『秋元の姓氏』秋本とも通用し、上総周准郡秋元庄が発祥とされ、宇郡宮氏族の流れをくみ、地名から出た氏姓と云う。

○ 『伊藤の姓氏』東海地方に多い氏名で、伊豆・伊藤 伊勢

の国から発祥、伊豆国田方郡伊東庄から起り、源流は藤原秀郷の流れとされ、伊藤・斉藤・佐藤・工藤の姓は、馬のクソの数より多い全国的に分布している姓である。

○ 『木下の姓氏』上加茂社の氏人や、伊勢内宮の社家にみられた姓で、佐竹氏族の流れをくむ人もあると云う。

○ 『佐野の姓氏』佐濃・狭野・狭沼 佐野の地名から起り、近江浅井郡佐野村より起りたる姓と云う。

○ 『沢田の姓氏』伊勢内宮禰宣家の荒木田、山城賀茂社の氏族、武蔵豊島郡駒込邑山王社の氏族等から出た姓と云う。

○ 『鳴海の姓氏』尾張愛智郡成海郷が発祥で、良岑氏族の流れと云う。

○ 『土岐の姓氏』美濃国土岐郡の土岐郷より起り、源頼光美濃源氏の流れとして著名な氏名と云う。

と述べているが、私達の嘉瀬では、藩政時代の名主や、藩から派遣されて土着した郷士、知行地持の役人等には苗字があったであろうが、農を主とした生活を営んで来た嘉瀬の人々は、大部分が百姓で、水呑み百姓や、小作人から構成されてきたところを見ると、苗字を持たない人々がほとんどであったろう。

苗字とは、これが現在私達が、名前の上に記した固定された一つの名称に過ぎない。社会通念上の必要から生れたものであって、個人を尊重する立場だけなら名前だけで通用するはずで、したがって苗字は一族一門を系統だてて証明し得るものだろう。

（編集部）

藪 睨 み 余 聞

秋 元 惣 之 進

嘉瀬 言 葉 考



嘉瀬は昔から、一般的に言葉が悪いと、他町村で云うが、嘉瀬の言葉は、発音の調子、言葉の音調、また訛りなどの濁声音があり、誤解される点が多々ある。



何処の地方へ行っても方言語は必ずあるが、嘉瀬は古来から、部落内結婚が多く、隣りから隣りへ、或は血族結婚もあり、井の中の蛙的視野も狭く、考察力も鈍く、悟りも遅いことと。

所謂、家族的な温くもりで、敬語も

無く、誰一人として言葉に対しては気兼ねなく話される。一つ一つの言葉を単語として、その起源を解釈すると、何処の国からも来たのは無く、純粋な日本語の、古形的漢字の頭文字が取り入れられ、全く根拠の無い喋り方をしておるのではない。

例 え ば

「お前、何処へ行きますか」と云うと、「ワ、青森に行く」となり
 ますが、「吾れ」の頭文字を取って「ワ」と云った。
 また、「ナ何処へ行きますか」と云うのは、「汝」の頭文字を取って「汝」と呼んだ。

田舎では、お父さんの事を「アヤ」と呼ぶ、昔中年の人が、自分の父を、他人に引き合せるとき、「この人は、吾れの爺です」と紹介したのが始まりで、吾れとは「吾」に通じ、また爺は「爺」とも解し、自分の父を「吾爺」と呼ぶようになったと云われる。

お母さんのことを俗に「アパ」と云う。「アパ」はすなわち「吾母」となる。

お婆さんのことを「アバ」とも嘉瀬では云う。「アバ」は、吾れの婆さん、すなわち「吾婆」となった。

一般的に嘉瀬だけで無く、津軽一円では、父や母に孫ができること、「オド」「オガ」となる。「オド」「オガ」は父母に対する敬語の「さん」を取りのぞき「御父」「御母」が「お父」「お母」になったのだそうです。

× × × ×

何処の家でも珍らしい喰べ物や、お美味しい物があると、親戚や隣り近所や友人に持って行き、これ「ワンツカ」だけでも喰べて下さいと云いますが、「ワン」は、私達が日常食事時、汁を吸う小さな

『腕』のことで、『束』は、四本指で握れるだけの少量の意味で、腕は小さいし、ツカは少量から、『ワンツカ』は、ほんの少しと云う意味だそうだ。

無理な出来得ない事を『テンポで無いか』と云いますが、人間が天に歩いて行けないのに『天に歩いて行く』と云っても、無理なことは目に見えている。『歩はポ』であるから、『天歩』の始まり。

『シヨパリ』は、相手に対して『情け』が無く、勝気で理解が無く強引に自分の意志を押し通し張る人間を、『情張』と云う。

津軽地方の代表的方言に『アズマシ』がある。その源点は、吾の妻は、意の儘に身体を預け、双方満足することから、さすが吾が妻、即ち、『吾妻し』が、『アジマシ』となる。

昭和五五年 五六年は、天明と天保以来の大凶作であった。今年も春から寒く、また『ケガジ』で無いかと農家の顔をくもらせたが、食餓死とは、『食えなくて飢えて死ぬ』ことで、『食餓死』だ。

『カダクラ』頑固者の代表を云う。右の物を左、左の物を右、何を云っても、ウンともグンとも言わない、強固な倉は、大風でも、大雨が降ってもビクともしない。反応がないことから、固い倉は頑強で動かないところから、『固倉』が『カダクラ』者となった。

人と競争したり、対人関係になると『ケパレ』とよく言います。『力』一杯、身体を張って、人を蹴ッ飛ばしても頑張る。蹴けると張るところから『蹴張れ』となった。

『ホンジナシ』、人を軽蔑した言葉。ホンジナシと云うのは、人のやれる事もやれないで、ポヤーとして、言ははその業務に対して、知

能が遅れ鈍感であること。

その起源は、昔おそらく津軽人だろう、何を読んでいるのか聞いても答えない。その本に文字が無いのかと聞くと、『この本は字の書いてない本だ』と、『本字無い』が、『ホンジナシ』になったとか。

一般的に恐ろしい事であった。吃驚したことの表現を『タマゲタ』と云うが、昔ある部落の人、真暗な夜道を歩いていたら、突然目の前から火の魂が飛んだ。吃驚仰天失神した。通りかゝった者が、おこして回復すると、『魂消だが』、が、『タマゲダ』の語源となったと云われるが、本当かどうか。

嘉瀬の言葉は一般的に悪く、悪い言葉の代名詞を『嘉瀬言葉』と云われてきた。一ツ一ツの単語を集約したものが津軽方言に成立したのであろう。そのなかで嘉瀬独特の表現言葉が生れたと思う。諸氏の嘉瀬言葉についての悟源の考えは如何に。

蝦

夷



かたりべ

『蝦夷』 蝦夷とは、何んらかの意味で、朝廷と敵対にあり、常に朝廷と対抗し続けて来た。

朝廷側から見ると、東北みちのおくに住む人種は、粗暴で、身体には粗衣を着け、頭の髪は茫茫と鬚は荒れ放題で、野番人種であるから

『蝦夷』と名付けよう。『道の奥未開発の原住民蝦夷』と朝廷側から名付けられたのが私達の祖先津軽人であります。

大和朝廷は何時にも権柄の笠で振り廻し、貧賤の目で睨み、住民からは油が出る程に搾り、貴族は榮耀榮華をきわめ、豪華絢爛な生活をしてきた。史実を通して見たとき、これが矛盾であって、何んであるうかと、一人つぶやく。

薬師の不思議



往昔には、今の小田川が冷コ水から薬師神社の南側を流れていたと云う。(今の鍛冶町南側の大堰を指す)

古老の語り伝いに依ると、今から約四〇〇年前の天正十四年(西暦一五六六)大浦為信方の金岐軍団(今の金木)が、五〇〇人の軍勢を連れて、嘉瀬城を攻撃。嘉瀬城の軍勢は、金岐軍勢を敗退させたが、嘉瀬城の重臣新井光兼は、金木軍の再度に渡る攻撃を察知し、嘉瀬城の財宝を、小田川下流の浮島(薬師神社の森)に隠す様に家臣に命じた。家臣と僧侶の二人が、嘉瀬城から「財宝」を舟で、真夜中に下流の浮島に運び、約六尺位の穴を掘り「財宝」を埋めたと云う。

財宝を埋めた土地の後に礎石として、「組み石」を並べて、祠を建て祀り、背後には松を植えたと云う。家臣と僧侶は、嘉瀬城が落城したのも知らず、嘉瀬城祈願の読経を拜みながら、浮島(薬師神社)で

永眠したとの事です。

其后、雨が降ると、薬師神社の地底から、「バツタン バツタン」と云う音が聞えて来るそうで、嘉瀬城の財宝を埋めた家臣と僧侶が、「財宝」を、この世に知らせる為の、地底からの音なのか、それとも大昔、流水で死んだ娘が、薬師神社迄流れ付き、この世を恋しくて、「機織」を織る音が、地底から聞えて来るのか、『世にも不思議』な音だと、今でも古老達は語り伝えている。

今もある礎石は、家臣と僧侶が、嘉瀬城落城寸前に財宝を埋めた祠を建てる為の礎石の「組み石」ではないかと、古老達の語り伝えを私は信じる。

婿の定め



婿と云うと、一口に云って仕事で旺盛で、素行が良く無ければ、婿の資格がなく、なれないのが一般的だ。

農家であれ、なんであれ、婿は当然労働力の主体となるが、作業日程は両親からの指示で、其の日から精心的に自由が束縛され、朝、まだ家族が目をさまさないうちから起きて馬草を刈る。馬の手入れと。

春三月早々になると、北風が吹く苗代時季、苗代の水に薄い氷が張る中を、素足で水を歩き、苗代整地の準備。春先の苗代かきは稼婿逃げるの諺がある。

苗代が終ると、田打から田騒き、田植と、間も無く一番除草から、三番除草までと、田の草取りは、腰が痛い、肩が張る、指の爪が痛い。どんな仕事をして、普通の人より、能率を上げなければならぬのが婿だ。

春先から丹念に手入して来た稲が稔り、身体をいやす間もなく稲刈る。疲労で綿の様に、疲れ果てるまで働いても、蔭言葉で「この捨婿」と愚痴られる結果となるのが婿の定め。

婿は、いくら苦勞して働いても、何年過ぎてても婿で、死ぬ迄婿は『婿』である。昔から小糠三升あれば婿に行くとの諺え。

だが今は、世の中が一八〇度転回し、嫁婿の大飢僅で、農家では嫁の来てが無く、来ても姑は氣兼ねばなし、解放的な時代になったもんだ。

嗚呼 嘉瀬城跡



嘉瀬城（お城山）跡に登ると、遠く七宝長浜が見え、又推見崎も眺められる。風光明媚で、その間に、幾つもの部落が散在している。

東は中山山脈が、屏風のように、山々が連らなっている。

昭和五四年七月二八日、私達ふるさとを採る会の会員数名が、嘉瀬城の城跡を踏査。城跡は、今は松林が青々と繁茂林立しているが、さすが、誰が見ても、平坦地の、自然の地形を活かした、城塞跡地の好

適場所であると感心させられた。

本丸跡、継の長さ二四米七〇、横の長さ一五米と、又、よく氣を付けて見ると、堀が三段に別かれ、内堀、中堀、外堀とあり、今は空堀となっている。堀の長さは、内堀で三五米五〇。巾は六米五〇。深さ二米あり、山根沿いの、下の切街道からは、高さ約八〇米で、正に地形を利用した、城塞跡地とも云える。

私達嘉瀬ふるさとを採る会員数名で城跡を踏査中、本丸跡の平坦地から東側約五米の傾斜地を掘っていたところ、深さ約七〇〜八〇センチ位のところから、『カツン』と言うふうな音に気が付いて、拾ってみると、一個の鉄片でした。

よく土を落として、洗ってみると、長さ一七五ミリ位の鉄の腐食した槍と考えられる鉄片で、今でも貴重に保存している。

今から数百年前にさかのぼるが、嘉瀬城は、飯詰高橋城の支城として築城された。

飯詰の高橋城主朝日氏の本姓は藤原で、藤原藤房の子、藤原景房（朝日左衛門尉行安）が、今から約六三八年前、興国五年（一三四四年）に、飯詰に高橋城を築城した。三年後の興国八年八月（一三四七年）に飯詰高橋城主朝日左衛門尉行安は、家臣の嘉瀬光明宗範に、あの山（嘉瀬山）にも支城を築城するよう命じた。

また、朝日左衛門尉行安は、浪岡北畠頭村の幕下で、頭村は『北畠親房』の子孫と伝えられ、今から約六〇四年前の天授四年（一三七八年）に、浪岡を拠点に、附近一帯を支配していた。

天正六年七月（一五七八年）大浦為信によって、浪岡北畠が滅ぼさ

れたが、飯詰高樞城主朝日左衛門尉行安、為信に抵抗すること拾数年、その間に、二回にわたり為信の攻撃を受けながら、節に屈せず、孤立無援の辺境にありながら、為信軍勢を撃退している。

翌年の天正七年（一五七九年）再度為信の軍勢は岩木川を下り、高樞城を正面攻撃、これに抗戦し、数年という持久戦に入った。

最后まで抗戦する高樞城軍、行安の家臣三上定之丞は、兼てから為信勢の攻撃を余知し、嘉瀬城、小田川城、金岐城守津島金左衛門、大浦為信に『加勢』を依頼してあるも、金岐城守津島金左衛門、大浦為信に『寝返り』裏切る。三上定之丞嘉瀬城に使いを出し、嘉瀬光明宗範に防戦体制を命じ、宗範直ちに蝦夷の主長である、友邦八重と佐助を小田川城に配置。嘉瀬東館に浜館三郎永光を、西館に三浦権十郎重孝を配し防戦体制を整える。

天正拾年（一五八二年）裏切者の金岐城守津島金左衛門、為信の助勢で、総勢五〇〇人の軍勢で嘉瀬城を攻撃。この時嘉瀬城の兵力二五〇名のうち、嘉瀬城に百五十名、小田川城に四十名、嘉瀬東館に二十五名、嘉瀬西館に三十五名。騎馬拾五頭で応戦。

嘉瀬宗範、並に浜館永光、三浦重孝、身体に鎧兜を付け必死に防戦し、金木勢五〇〇余名の軍勢に、無勢なりしか、小田川の八重佐助と共に、敵陣に夜襲や奇襲攻撃をかけ、また枯野原に火を放ち。嘉瀬城は、城こそ『小なりと』云いども、宗範『奇略縦横の知将であり』じか、金木勢横合いから突如に襲いかかる。これをむかいる嘉瀬軍、得得の『弓で火を放ち、まち石つぶを投げ』金木勢を敗退させる。（今でも金木と嘉瀬の戦いと古老達の語り伝えとなっている）

天正拾五年五月（一五八七年）大浦為信所無に本陣を置き、新城

城番阿部孫三郎、新城より山越えして、嘉瀬城を背後から攻撃、北西からは、金木城守津島金左衛門勢が総攻撃を開始した。当時の嘉瀬の人口は知るすべもないが、嘉瀬領民は一人残らず参戦。金岐勢並に新城勢と激しく戦ったが、十重二十重に囲まれ、多勢に無勢、奪戦虚なく、遂に天正十五年五月二十一日（一五八七年）。嘉瀬東館、西館小田川城が炎上、嘉瀬城もあわれ落城。嘉瀬領民の大半は城と共に枕をならべ討死したと伝えられる。

また、嘉瀬光明宗範、落城寸前に妻子を黒石方面の山奥隠れ里に落し、宗範は最起を期す四・五名の従者と共に越に逃避したとも伝えられている。（『嘉瀬と言う名字は、黒石地区に数軒あり、新潟県内に嘉瀬と言う地名の部落が存在する』）

嘉瀬城が落城した翌年、天正拾六年六月拾六日（一五八八年）大浦為信、津軽の総勢でもって、南朝ゆかりの最後の、飯詰高樞城を襲う。天正拾六年六月拾八日、朝日左衛門尉行安討死し果てる。

栄故盛衰世のならいと言ふも、蝦夷人の首領八重佐助、『津軽の情ツ張り』を通して見せた根情、嘉瀬城跡は松林が青々と繁茂林立し、昔の面影は空堀が残るだけ。

メモ帳③ 北海道と津軽

『北海道侵略の初まり』

南部守行に敗れた下国安東氏の盛季のころから、奥州豪族が渡道、道南の各地に館を築いたところと前後して、渡り人が（和人）とアイヌの対立が強くなった。

嘉瀬村
忠魂碑

日清日露大東
亜戦争戦歿者

鳴海永太郎
伊藤精八
小山内勘太郎
秋村長三郎
成田萬次郎
山中周吉
須崎元吉
山中龍雄
伊藤哲雄
鳴海繁四

木下林蔵	鎌田由一	鎌田林之助	小松藤次郎	原田兼吉	小山内初四郎	舛甚勘吉	平川久信	沢田国雄	沢田国平	飯塚秀男	鎌田岩男	斉藤善太郎	山中征男	山中勝司	今熊太郎	成田長三郎	原田薫雄
山中信高	棟方由之助	鎌田三太郎	山中弘	鳴海龍三	土岐武男	中村忠一	鳴海恒男	伊藤嫡男	津田稔次	津田一郎	山中兼雄	杉山清実	木村武智雄	斉藤亀八	山中武四郎	木村松四郎	山中慶蔵
杉山善助	鳴海武四郎	原田末光	平川久光	三上多七郎	松川専次郎	鳴海進	秋元清三郎	秋元元広	伊藤立雄	鎌田薫	山中新一	伊藤征八	山中長一郎	黒川清次郎	鳴海忠	木村亮信	山中健治
工藤君吉	伊藤征弘	鎌田君吉	伊藤武四郎	森栄三郎	斉藤勝巳	鳴海進	秋元清三郎	秋元元広	伊藤立雄	鎌田薫	山中新一	伊藤征八	山中長一郎	黒川清次郎	鳴海忠	木村亮信	山中健治
三上勝見	加藤勇二	三上子之太郎	秋元兼太郎	飯塚長栄	鳴海太郎	鳴海進	秋元清三郎	秋元元広	伊藤立雄	鎌田薫	山中新一	伊藤征八	山中長一郎	黒川清次郎	鳴海忠	木村亮信	山中健治
鳴海金蔵	浜田常雄	浜田定一	須崎栄吉	成田忠雄	松川興三郎	浜田吉松	斉藤良雄	中村英雄	中元平内五郎	山中正美	神島安光	泉谷嘉工門	斉藤道罔	斉藤秀雄	其田長六	太田定杉	其田正一郎
増田清次郎	其田弥士男	尾野美定	増田末作	白取久美	山中貞一	高橋市太郎	其田年次郎	増田千代吉	昭和三十三年	八月忠魂碑移	軋竣工	工事者五所川	原市小田川石	材工業所	石工鳴海菊次	其田正一郎	其田正一郎





藩政時代のころの「こどもの生活と遊び」は聞くすべもないが、明治のなかばから、第二次世界大戦前迄は、子どもの遊びに基本的には大きな変化はなかった。着物から洋服、全たく手造りから、多少は買ひ与えられたが、仕事と年令の引上げられるとともに、それも急激ではなく数十年を要して、やっと文化の香りの一端を覗きみるに過ぎない環境を強いられてきた。昭和十年前後のこどもの世界を探ってみることにする。

地域と、環境と、その家々の躰によって、かなりの違いが生じていたが、嘉瀬のこどもの世界と、中柏木のこどもの世界を比較するに、相当な違いがあったことは否定できない事実だった。

例へば中柏木では、家によって水泳をさせない。野山の自然の野生植物を食べさせないという、きつい家もあったが中柏木の平均的なこどもの遊びの世界を写実してみる。

中柏木は自然を満喫、ただ出来得ないのは、海の幸だけで、実に多くの遊び方があった。勉強そっちのけで、ひたすらに遊びを追究し、捜し歩いたことを、当時使っていた方言の固有名詞を、註釈なしで綴るが、便所が「ヘンチ」、帽子が「ケフ」、長靴が「ケリ」のたぐいで、アケビが「アゲビ」になまること。まずは御容赦を願いたい。

中柏木地域から探る

遊びの回想

原田 万治



自然の山野はこどもの天国

「味噌豆」

人間は生きる為には、毎日食なくして生存することはできない。原始から今日まで、質素であれ、華美であれ、新陳代謝を円滑に保つて、衣、食、住、娯楽と欲望は限りないだろうが、中柏木は背後に野山があり、こどもにとつ

ては遊びの天国だ。

雪が消え、春四月に入ると、自家用の味噌を造るために大きな釜に大豆を煮る。部落で毎年五・六軒は味噌を造るが、大豆が煮えたるを見計って、豆を貰うに行く。「メダリ」か、着物・服の裾に、木で作った杓子で一杯づつ貰うのだが、食べ余った豆を藁の「メゴ」に通し、乾かして食ったもので、たづら坊主は貰った豆のぶっつけ合いと